The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古代語・現代語の「逆接」 : 古代語のトモ・ドモによる意味対立を中心に
Author(s)	衣畑, 智秀
Citation	語文. 2004, 83, p. 49-58
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69046
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

古代語・現代語の「逆接」

――古代語のトモ・ドモによる意味対立を中心に――

衣畑智秀

一　はじめに

古代語の「逆接条件」と言われるトモとドモ（ドも含める）は、トモが仮定条件を表し、ドモが恒常条件と確定条件を表すと一般には考えられている。[1]

仮定条件……死すとも已まじ。
逆接条件　恒常条件……君子は身死すれども志を改めず。
確定条件……急ぎしかども乗り後れたり。
（小林（一九九六：一一））

また、恒常条件は、現代語においてテモで表されるようになる（たとえば、「君子は死んでも志を改めない」）とされる（此島一九六六）から、結局古代語と現代語の「逆接条件」は次のような相違を見せると言える。

【表1】

トモ	仮定条件	テモ
ドモ	恒常条件	
	確定条件	ケド

では、なぜ古代語では恒常条件と確定条件が共通の形式で表され、現代語では仮定条件と恒常条件が複合的に捉えられているのか。

前稿では、この問題のうち、現代語のテモとケドの意味的対立について考察した。本稿では、古代語のトモとドモがどのように対立しているかを問題とする。結論を一部先取りすると、現代語のテモとケドは、情報の処理単位によって形式が分化しているが、古代語の対立は、「仮定」などの意味的な性質が重要になってくる。古代語のトモとドモをこのような意味的対立により説明することはさほど新しいことではないが、本稿では、できるだけ客観

的に証拠を示し、現代語と対照することで古代語の特徴を鮮明にしたい。

なお古代語の資料としては『万葉集』（八世紀）を中心に使用し、平安初期の散文資料（一〇世紀前半）を補助的に用いる。

二　現代語のテモとケド

歴史的な観点から見ると、一節で述べたように、現代語のテモは「仮定条件」と「恒常条件」を表すとされるが、現代語の記述においては、テモは「確定条件」も表せると考えるのが一般的である。

(1)　a．勉強しても合格しなかった。

b．彼は先日、全日本選手権で優勝した。しかし、優勝しても、代表には選ばれなかった。

しかし、テモの「確定条件」がケドと必ずしも言い換えられるわけではないから、「確定条件」という分類は、テモの意味を説明したことにはならない。そもそも、テモが「仮定」「恒常」「確定」のようにどの条件も表していることは、テモの意味に関してこの伝統的な分類が意味をなさないことを示している。

筆者は衣畑（投稿中）で、テモは前件と後件が一つの処理単位として扱われ、ケドは前件と後件がそれぞれ独立した処理単位として扱われると考えた。これは、南（一九九三）でテモはB類、ケドはC類と分類されたことと凡そ対応する。

テモは、B類であれば、「仮定」「恒常」「確定」といった条件に関係なく使用することができるのである。一方、ある事態を「仮定」することは、そこで起きる事態と密接に関係しており、それらは全体で一つの処理単位となる。よって、C類のケドは「仮定条件」が表せないのである。[2]

また、(2)のように、テモは連体節内や条件節内に入ることができるが、ケドはできない。これは、テモがB類であり、ケドがC類だからである。

(2)　a．コチラカラ呼バナ（??イケド／クテモ）、来テクレタ近所ノ人タチ

（南（一九九三：九八）の例を若干改変）

b．毎週末ニューヨークへ行（??くけど／っても）お金が減らないなら、彼は随分金持ちなのだろう。

一方、(3)のように、ケドは前件だけで、独立して同意や返答に用いることができるが、テモはできない。ケドは前件だけで独立した処理単位となるが、テモは前件だけでは処理単位とならないからである。

(3)　a．甲：山田君は将棋が強いですよ。

乙：たしかによく将棋をさしてい（るけど／??ても）、勝ったところは見たことがありません。

b．甲：今、雨は降ってますか？

乙：雨はやん（だけど／??でも）、随分濡れてしまいました。

以上のように、現代語のテモ、ケドは、「仮定」や「確定」と

言った意味的な分類には無頓着で、統語的、あるいは情報処理的な観点から形式が分化している。しかし、古代語はどうか。以下で見るように、古代語のドモは、ケドに対応する用法が見られる一方、容易に連体節内にも現れ、B類の用法も持っている。よって、現代語の基準で見ると、ドモの説明は選言的にならざるをえない。トモとドモの対立には、古代語独自の基準が必要なのである。

三　古代語のトモ

三・一　先行研究の問題点

古代語のトモが「仮定条件」を表すということは、従来の研究者の間で一致した意見となっている。しかし、「仮定条件」が何を指すのかが明示的でないために、現象の観察や概念に混同が見られるという問題がある。

トモが「仮定条件」を表すという場合、(4a)、(4b)のように前件が事実に反することや、話し手の知らないことを指す場合は問題ない。問題となるのは、(4c)のような前件が現実の事態にもかかわらずトモが使用されている用例である（以下『万葉集』の歌番号を記す）。

(4)　a．うぐひすの鳴くくら谷にうちはめて焼けは死ぬとも（夜気波之奴等母）君をし待たむ（3941）

b．月草に衣は摺らむ朝露に濡れての後はうつろひぬとも（徙去友）（1351）

c．楽浪の志賀の大わだ淀むとも（與杼六友）昔の人にまたも逢はめやも（亦母相目八毛）（31）

(4c)の例について、佐伯（一九三八）は「修辞的仮定」（二五六ページ）と名づけ、前件の内容を「知ってゐることは事実である筈であるが、それを仮定の表現にしてゐる」（二五五ページ）と述べている。この佐伯（一九三八）の説明は、トモが「仮定条件」を表すことを前提としているが、「仮定の表現にしてゐる」ことは、トモが使われていることにしか根拠がなく、論の循環が起こっている。これを防ぐには、「仮定条件」が使える条件を書き加えなければならない。

古典文学大系（高木他（一九五七：三三三））や鎌倉（一九八八）では、「強調」という用件でこれを説明しようとしている。しかし、なぜ、「強調」すれば「仮定条件」が使えるのかについての説明がない。そもそも「強調」は（逆接の）「仮定条件」に伴う効果であり、意味と見なすことはできないだろう。[3] このように「仮定条件」を説明する用件が不十分であるがために、他方では、「仮定」とは事実そのものとは関係なく（木之下一九四三）、現代語のテモも、テモが使われている限りは「仮定条件」と見なそうとする立場（塚原一九六九）も生まれている。これもやはり循環論であり、かつ、トモとテモの違いを説明することもできない。

つまるところ、トモが「仮定条件」を表すのは正しいとしても、どのような場合に「仮定条件」が可能となるかについての考察が

欠けていたため、さまざまな解釈が派生してしまっているのである。

三・二　仮定条件としてのトモ

本稿の結論は、トモは「仮定条件」として問題ないというものである。ただし、従来と異なり、「仮定条件」の指す範囲に限定を加え、トモの実例がその範囲に収まるかを検討できるようにする。この範囲とは、まず、我々が「仮定」できる情報の差に関するものである。本稿では、次のようなスケールを考える。

(5)　情報の仮定可能性のスケール（？＊等はその情報が仮定しにくいことを表す）

非事実（事実に反する情報など）　＞　聞き手の知識・知覚など　＞　？外界の事態　＞　＊話し手の知識、話し手自身のエピソード記憶など

事実に反する情報は、仮定としてしか導入できない。また、事実でないという点で、未来に起こりうる出来事なども、仮定となりうる。「聞き手の知識・知覚など」は、直接知っている訳ではなく、間接的な情報という点で非事実と共通し仮定的になると考えられる（久野（一九七三）、網浜（一九九〇）等の条件文研究を参照）。一方「外界の事態」は、直接知ることのできる情報である。しかし、まだ長期記憶に入らず、一時的にバッファに蓄えられた情報と見なすこともできる。ここでは、仮定することができる境界的な情報と考えておく（Akatsuka（一九八三）等を参照）。これらに対し、話し手の知識や話し手以外知りえない自身のエピソードなどはすでに真として受け入れられており、仮定することはできない。[4]

次に、もう一つの「仮定条件」の特徴として、後件の情報が、言及世界（仮定により構築された世界）において仮定に先立って真となることはないという制約がある。真である命題は、いかなる命題からも含意されるので、そこで敢えて仮定を行えば、すでに真である後件を導出するのに、全く使う必要のない仮定を行うことになってしまうことになる。つまり、後件の情報は、言及世界において、前件より推論で得られた情報でなければならない（詳しくは坂原（一九八五）第二章を参照）。[5]

(6)　後件の特徴

前件の仮定から推論された情報　／　＊推論と無関係に真である情報

以上のような理論を基に、『万葉集』のトモについて分類したのが、表2、表3である。[6] 表2は前件の情報の性質、表3は、後件の述部の種類から分類している。

【表2】

反事実的	未知	聞き手	事実	計
25	31	5	6	67

【表3】

む	じ	べし	まし	命令	禁止	願望	その他	計
33	4	5	2	3	5	4	4	60

トモの前件は「反事実的」や「未知」のように仮定しやすい情報が多く、[7] 後件は推量の助動詞が多く占め、推論により得られた情報が多い。ここから、トモが仮定的な性格を持つことが分かる。これらについてはそれほど問題ないと思われるので、ここでは、それ以外の例（表2の「聞き手」「事実」、表3の「その他」）を検討する。

まず、前件が「聞き手」に属するような情報としては、次のような例がある。

(7) a. 言問はぬ木にはありとも（樹尓波安里等母）うるはしき君が手馴れの琴にしあるべし（許等尓之安流倍志）（811）

b. 山川を中に隔りて遠くとも（等保久登母）心を近く思ほせ我妹（於毛保世和伎母）（3764）

c. 高円の峰の上の宮は荒れぬとも（安礼奴等母）立たしし君のみ名忘れめや（美奈和須礼米也）（4507）

（7a）は、夢の中で琴が娘子となり「君子の傍にいたい」と歌を詠んだのに対する旅人の返歌であり、「言問はぬ木にはあり」とは聞き手（＝琴）自身のことである（八一二番歌も同じ状況）。（7b）の「山川を中に隔りて遠」いことは、話し手も知っているが、このことを憂いているのは聞き手であり、前件は聞き手の知識を基に構成したと解釈できる。最後に（7c）は、直前に「高円の野の上の宮は荒れにけり立たしし君の御代遠そけば」（4506）という歌があり、この歌に対する返歌と考えられる。とすれば、「高円の宮が荒れたこと」は聞き手からもたらされた情報として話し手は構成することができる。これらはいずれも話し手も成立していることを知っている事実であるが、聞き手の関与が強いということで一貫している。よって、その事実を聞き手を通して間接的に構成することができ、トモを使って仮定的に述べることが可能になるのだと思われる。[8]

次に、「事実」に分類した例を全て挙げる。

(8) a. 楽浪の志賀の〈一に云ふ「比良の」〉大わだ淀むとも（與杼六友）昔の人にまたも逢はめやも（亦母相目八毛）（31）

b. 松浦川七瀬の淀は淀むとも（与等武等毛）我は淀まず君をし待たむ（吉美遠志麻多武）（880）

c. 沖つ波辺つ藻巻き持ち寄せ来とも（依来十方）君にまされる玉寄せめやも（玉将縁八方）〈一に云ふ「沖つ波辺波しくしく寄せ来とも（縁来登母）」1206

d. 春山は散り過ぎぬとも（散過去鞆）三輪山はいまだ含めり（未含）君待ちかてに（1684）

e. 春まけてかく帰るとも（此歸等母）秋風にもみたむ山を越え来ざらめや（不超来有米也）（4145）

(8a)は、前項でも取り上げた、佐伯（一九三八）以来の問題例であるが、「志賀の大わだ」を擬人的に聞き手に見立てて詠んでいるのかもしれない。先の「聞き手」のところには、「ほととぎす」を擬人的に聞き手に見立てていると解釈される例（四〇六六歌）を分類した。その他の例は、いずれも事実である。しかし、(7)に挙げた例も含めて、前件はいずれも話し手の外界にある事態であり、「勉強しても合格しなかった」のように前件が話し手自身の経験を表すような確定の典型的な例は一例もないことに注意したい。[9] また、後件も(8d)を除き全て推論の結果になっている。

(8d)の「含めり」は補読例で、表3の中には数えていない。この歌は、古典大系では「散り過ぐれども」と訓まれていて、トモでは解釈しにくい例にも思われる。[10] 後件が補読でない例には、(8d)のような例はない。表3で「その他」に分類したものは、次のように「たとえ～されても構わない」といった、前件の反事実的状況を認めるような例（他に(9a)の類例が二例）しかない。つまり、これらの形容詞自体が話し手の態度を表しており、モダリティ形式を要求しないのである。

(9) a. 我がやどの梅咲きたりと告げ遣らば来と言ふに似たり散りぬともよし（散去十方吉）（1011）

b. あられ降り遠つ大浦に寄する波よしも寄すとも（縦毛依十方）憎くあらなくに（憎不有君）（2729）

以上から、古代語のトモは仮定的な性格が強かったことが分かる。では、「勉強しても合格しなかった」のような典型的な確定はどのような形式で表していたのか。ドモには次のような用例が多数見られる。

(10) a. 家人の使ひにあらし春雨の避くれど我を（久列杼吾等乎）濡らさく思へば（1697）

b. あしびなす栄えし君が掘りし井の石井の水は飲めど飽かぬかも（雖飲不飽鴨）（1128）

c. 衣手を打回の里にある我を知らにそ人は待てど来ずける（待跡不来家留）（589）

(7)(8)と(10)の違いは人称という観点から明らかである。前者と違い(10)では、(5)で仮定しにくいとした話し手（一人称）の経験を表している。これらはいずれもテモでしか訳せず、ここにB類でも仮定的ならトモ、確定的ならドモという使い分けが認められる。

四　古代語のドモ

次のような例は、トモとドモが似た環境で使用されているが、トモは仮定的に、ドモは確定的に使用されていると思われる。(11)のトモには「万代に」「ひねもすに」等の修飾語句があって、前件が非事実的に表現されているが、(12)のドモは必ずしもそのような修飾語句はない。またドモの後件は(12a)のような喚体句の例が多く、話し手自身の経験を表すと解釈される例が多い。

(11) a. 万代に見とも飽かめや（見友将飽八）み吉野の激つ河内の大宮所（921）

b. 乎布の崎漕ぎたもとほりひねもすに見とも飽くべき

(12)

a. あをによし奈良の都にたなびける天の白雲見れど飽かぬかも（見礼杼安可奈良乃都）（3602）

b. ま梶貫き舟し行かずは見れど飽かぬ（見礼杼安可奴）麻里布の浦に宿りせましを（3630）

c. おろかにそ我は思ひし平敷の浦の荒磯の巡り見れど飽かずけり（見礼度安可須介利）（4049）

表1からは、古代語でドモが、現代語でテモが使用されるような例が「恒常条件」とされている。しかし、たとえば(12c)のドモはテモでしか訳しにくいが、一回的な事態を表しており「恒常」とは言えない。これは、二節で見たように、テモに確定的な例があることからすでに明らかである。

ドモには、次のように現代語のケドに当たるC類の例もある。

(13)

a. 春さり来れば鳴かざりし鳥も来鳴きぬ咲かざりし花も咲けれど（花毛佐家礼杼）山をしみ入りても取らず草深み取りても見ず（16）

b. 梓弓引かばまにまに寄らめども（依目友）後の心を知りかてぬかも（98）

c. 真木柱太き心はありしかど（有之香杼）この我が心鎮めかねつも（190）

d. 佐保山をおほに見しかど（於凡尓見之鹿跡）今見れば山なつかしも風吹くなゆめ（1333）

e. 秋付けばしぐれの雨降りあしひきの山の木末は紅にほひ散れども（仁保比知礼止毛）橘の成れるその実はひた照りにいや見が欲しく（4111）

しかし、これらも、(13b)のような例があることから、事実として定まっているという意味での「確定」ではない。「確定」や「恒常」といった概念は曖昧であり、ドモの意味を的確には説明できない。また、「恒常」「確定」をテモ・ケドとの関係を捉えるためだけの便宜的な概念だとしても、なぜ現代語でテモとケドで分けて表すような意味を、ドモは一つの形式で表したのかという問題が依然として残る。次節では、この問題も含めて現代語と古代語の「逆接」を体系的に捉えなおしたい。

五　古代語と現代語の「逆接」

これまで、トモには仮定条件の例、ドモには確定的な例やC類の例があることを見てきた。この点で、ドモの意味は多義的である。そこで本稿では、ドモの意味を、「恒常」や「確定」と積極的に記述するのではなく、ドモは単に前件と後件が対立するような意味関係を表していただけで、B類やC類といった区別はもちろん、「仮定」「恒常」「確定」といった意味に関しても「無標」の形式であったと考える。これに対し、トモは「仮定」という意味を積極的に表す「有標」の形式である。よって、古代語と現代語の「逆接」の相違は表4のようにまとめられる。

【表4】

トモ	有標（仮定）	B類	テモ
ドモ	無標（仮定以外）	C類	ケド

ここで、ドモが無標であるならば、「仮定条件」も表してもよいはずだという反論が考えられる。これまでの研究は、ドモが「仮定」を表さないからこそ、「恒常」「確定」というラベルを使用していたとも見られるからである。しかし、無標の形式は、他に有標の形式があれば、その意味を表すことがないという現象は、言語の中によく見られる。たとえば、現代語のスルとシタの対立は、しばしば前者が無標で後者が有標の形式であるとされるが、「過去」の有標の形式シタがあるために、スルは「非過去」を表している。

ただし、この無標の意味は、有標の形式との対立があって成り立つものなので、その対立が何らかの事情で弱まると、有標の意味を表すこともありうる。あまり多くはないが、中世に見られる次のような例は、ドモが仮定条件も表しうることを示している。

(14) タトヒ戒ヲヤブレドモ、ナヲ輪王ニスグレタリ。タトヒ悪道ニヲツレドモ、ソノ所ノ王トナル。（三宝絵　下）

このような現象は、ドモを「恒常」や「確定」と捉える立場からは説明できない。一方、本稿の観点からは、古代語の対立も、(14)のような現象も無理なく説明できる。[11]

六　まとめ

本稿では、これまで「仮定」「恒常」「確定」という概念だけで説明されてきた現代語のテモとケド、古代語のトモとドモについて、それぞれがどのように対立しているかという観点から考察し、前者は情報の処理単位により、後者が仮定（有標）とそれ以外（無標）により対立していると考えた。これらの古代語から現代語への歴史変化については、「テ形＋モ（テモ）」という形式が、仮定条件を含むB類の「逆接」の意味をどのように語彙化、文法化していくのかが問題になると思われるが、それは今後の課題としたい。

注

(1) 小林（一九九六）のように表を掲げているわけではないが、同様の考えは此島（一九六六）、山口（一九八〇）などにも見られる。

(2) 「恒常条件」も前件と後件が密接な関係にある条件と思われる。

(3) 鎌倉（一九八八）では、トモは「強調比喩表現」であり、その「例外がない」としている。どのような意味で「強調」と言っているのかがはっきりしないので、反論することは難しいが、モがスケールを含意することにより後件を強調するといったもの（詳しくは藤井（二〇〇二）、衣畑（投稿中）など）ならば、次のような例は反例になると思われる。

・左奈都良の岡に粟蒔きかなしきが駒は食ぐとも（古麻波多具等毛）我はそともはじ（3451）

(4) 以上の点に関しては、ナラ条件文を用いて改めて別稿で論じる用意がある。

(5) 条件文と違い、譲歩文（逆接条件文）は、後件が事実を表すと見られる場合がある。たとえば、「たとえ勉強しなくても、合格した」といった反事実譲歩文では、現実でも「合格した」と解釈できる。しかし、この譲歩文が述べているのは、「勉強しない」世界についてであり、この世界においては推論に先立って「合格した（だろう）」ことが真になっているわけではない。よって、譲歩文の後件が事実を表すのは、現実の世界が、この推論の結果と偶々一致しているからにすぎない。

(6) 用例は、仮名書きのものに加え、音節数からトモ・ドモが判別できるものを採取し、意味のみによる例は除外した。また後件の述部も補読例は除外した。

(7) 「反事実的」とは、過去や現在の事実に反する事態以外にも、未来において起こりそうにない事態を分類している。「未知」は、過去、現在、未来に関係なく、話し手がまだ知らない事態を分類しているが、実際はほとんどが未来の例である。

(8) なお、文脈のより明白な平安初期散文（使用文献参照）を前件の情報の性質により分類したところ、聞き手の例が多く、やはりトモの仮定的な性格は顕著であった。

反事実的	未知	聞き手	事実	計
14	20	17	0	51

(9) このことは、現代語のナラの前件が、外界の事態である(i)の方が、話し手の内的な状態である(ii)よりも自然であるのと並行的である。

i ? 天気が良いなあ。天気が良いなら散歩にでも行くか。

ii * お腹が空いたなあ。お腹が空いたならご飯でも食べるか。

(10) あるいは(9d)は坂原（一九八五）の言う（仮定的）擬似譲歩文かもしれない。

(11) このような「有標＝仮定」、「無標＝仮定以外」という対立は、「順接条件」においても有効かもしれない。古代語の「順接」は仮定条件を「未然形バ」が表し、それ以外の理由文、偶然条件、恒常条件等を全て「已然形バ」が表している。とすれば、古代語の接続助詞の対立は、仮定を有標の形式で表し、それ以外を無標の形式が担うという対立であったと考えられるが、詳しい考察は今後の課題としたい。

使用文献

『万葉集』（『補訂版　万葉集　本文篇』塙書房）、『土佐日記』（新編日本古典文学全集）、『竹取物語』、『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』（以上日本古典文学全集）、『三宝絵』（新日本古典文学大系）

参考文献

Akatsuka Noriko (1983)'Conditionals', *Papers in Japanese Linguistics* 9, Kuroshio Syuppan, 1－33.

網浜志乃（一九九〇）「条件節と理由節―ナラとカラの対比を中心に―」『待兼山論叢 日本学篇』二四、大阪大学文学部、一九―三八

鎌倉暄子（一九八八）「上代におけるいわゆる接続助詞トモについて」『香椎潟』三四、福岡女子大学国文学会、五七―七四

衣畑智秀（投稿中）「日本語の「逆接」の接続助詞について」（仮題）『日本語科学』

木之下正雄（一九四三）「仮定条件法について」『国語国文』一三―

五、京都大学国文学会、四四-五〇

久野暲（一九七二）『日本文法研究』大修館書店
此島正年（一九六六）『国語助詞の研究―助詞史の素描―』桜楓社
小林賢次（一九九六）『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
佐伯梅友（一九三八）「「淀むとも」考」『万葉語研究』文学社、二五一-二五六
坂原茂（一九八五）『日常言語の推論』東京大学出版会
高木市之助他（一九五七）『日本古典文学大系　万葉集　一』岩波書店
塚原鉄雄（一九六九）「ても・でも―接続助詞〈現代語〉」『古典語現代語　助詞助動詞詳説』松村明（編）、学燈社、四〇一-四〇二
藤井聖子（二〇〇二）「所謂「逆条件」のカテゴリー化をめぐって日本語と英語の分析から」『シリーズ言語科学4　対照言語学』東京大学出版会、二四九-二八〇
南不二男（一九九三）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
山口堯二（一九八〇）『古代接続法の研究』明治書院

―本学大学院博士後期課程―